

# ニューズレター No.30

発行：水資源・環境学会 〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500 滋賀県立大学環境科学部内 電話 0749-28-8278

<http://www.soc.nii.ac.jp/jawre/>

## 2002年度 水資源・環境学会研究大会のご案内

2002年度研究大会を下記の要領にて開催いたしますのでご案内申し上げます。

### [研究大会] テーマ：人間生活と水

今年度の研究大会は「人間生活と水」をテーマに開催します。本学会は、発足の当初からこのテーマを研究活動の視野に入れ、グローバルとローカルという2つの位相を基軸においた水問題の把握を試みてきました。今回は、これま

での歩みを踏まえつつ、さらに新しい時代の課題に取り組んでいきたいと考えています。

水資源・環境学会研究大会事務局

[大会会場]：大学コンソーシアム京都（キャンパスプラザ京都）2階 第1会議  
TEL：075-353-9100 JR 京都駅前・中央口を出て西へ200m・中央郵便局の西隣

[大会日時]：2002年6月1日（土）  
10：30～17：00 研究大会  
17：30～19：30 懇親会

### [研究大会プログラム]

(10：30) 開会  
(10：30-11：10) 基調講演 水問題の普遍性と特殊性について 板橋郁夫（前会長）  
(11：10-12：00) 総会  
(12：00-13：00) 昼食

#### セッション1「人間生活と水」

(13：00-13：30) 名古屋の都市河川・堀川浄化を考えた 渡辺 泰（名古屋市上下水道局自主研究グループ・収水研）  
(13：30-14：00) 海民ダイナミズムと北東アジア文化 梁 説（都市生活環境文化創造研究会）  
(14：00-14：30) 滋賀県の地下水汚染 畑 明郎（大阪市立大学大学院経営学研究科）  
(14：30-14：50) 討論  
(14：50-15：10) 休憩

#### セッション2「環境問題をめぐる理論と実際」

(15：10-15：40) 環境マネジメントシステムの効用と有効性 西田一雄（地域環境システム研究所）  
(15：40-16：10) 水資源の国際取引と環境保護 松岡勝美（富士大学経済学部）  
(16：10-16：40) 生活史的にみた下水道技術の誤謬 末石富太郎（前副会長）  
(16：40-17：00) 討論  
(17：00) 閉会  
(17：30-19：30) 懇親会

2002年度研究大会発表要旨

**「名古屋の都市河川・堀川浄化を考えた」 渡辺 泰(名古屋市上下水道局自主研究グループ・収水研)**

河川環境の保全をその目的に加えた新河川法が施行され、全国各地で河川整備のあり方が議論されています。名古屋市の都心を流れる堀川は、江戸時代初期に名古屋城下建設の折に開削された、典型的な都市河川です。近代以降の人口と産業の集中によって「排水路」と化してしまった堀川を、いま市民と行政が連携して浄化する事業を進めています。

木曾川導水事業が、公共事業見直しの流れによって中止された今、既存の資源を活用した有効な対策が求められています。私たち収水研は、「水あまりの名古屋」で、流水のない堀川を蘇らせる方法を、水道、下水道、工業用水そして運河用水など、都市内の水の活用によって進めることを提言しています。タテ割り行政の壁を乗り越え、清流を復活させるプランを考えます。

**海民ダイナミズムと北東アジア文化 梁**

アジア地域は、水の恩恵を最大限に利用した世界に誇る農耕文化の形成地域であることは周知の事実であるが、同時に各地で高度な都市機能を発展させていたことが、近年の調査研究により明らかになった。私たちの祖先は、農耕社会を基盤とした高度でローカルな水循環システムを構築していたのみならず、広域型の循環システムを保持していたといえる。それは現在のグローバル化でいう「均質化」ではなく、むしろ生き生きとした地域の「特質化」がもた

**説(都市生活環境文化創造研究会)**

らした所産といえる。今回は、地域の「特質化」がもたらす人間生活と水との関わりについて取り上げてみたい。

また、海上交通の要所であった沖縄、チェジュド、大見島(瀬戸内)の三つの島を選び、それぞれが島の閉塞性と解放性をどのように機能させ、人間の生活基盤、社会基盤を形成させていったのかを比較考察する。

**滋賀県の地下水汚染 畑 明郎(大阪市立大学大学院経営学研究科)**

昨年末に滋賀県守山市と野洲町水源地で四塩化炭素による地下水汚染が明らかになった。両市町とも数年前から深井戸原水が環境基準(=水道水基準)を超える四塩化炭素が検出されていたにもかかわらず、他の井戸水などで希釈(守山市)、または簡易ばっ気処理後希釈(野洲町)して給水していた。国

や県に報告せず、住民にも知らせていなかった。

本発表では、守山市・野洲町の地下水汚染問題を中心に、滋賀県下の地下水汚染状況、滋賀県の工業化、とくに電気機器工業の進出と地下水汚染との関わりなどを検討した結果を報告する。

**環境マネジメントシステムの効用と有効性**

近年、地球温暖化防止への対応や循環型社会形成の推進に関する関係法規制の遵守など、環境対応の要請が世界規模で厳しくなっている。1992年の地球環境サミット以降、世界的な傾向として、環境対応をマネジメントシステムといった仕組みで対応する事の有効性が確認され、ISO14000等のシステム規格が国際標準として制定され、普及している。

**西田一雄(地域環境システム研究所)**

我が国は、現在世界最多のISO14000認証国として注目されているが、認証取得企業から、現在の「環境マネジメントシステム」は、環境保全に役立たないし、効果も疑わしい等の声が少なからず上がっている。環境の世紀と言われる今、人類が直面している環境問題を正しく解決し、持続可能な社会形成を確実なものとする為に、ISO14001をはじめとする

環境マネジメントシステムの各種国際規格やその仕組みが、本当に役立つかどうかを検証しつつ、活用

の有効性や、真のマネジメントシステムの効用を明確にし、今後の環境対応の在り方について論じたい。

### 水資源の国際取引と環境保護

松岡勝美（富士大学経済学部）

今世紀、国際社会は「水の危機」に直面している。近年この問題に対処するために各方面から努力がなされているが、一つのオプションとして、水資源を国際的に自由に取引できる体制が、その効率の利用と資源配分に役立つとする見解がある。しかし水を越境して大量に輸出または輸入することになると、その実現可能性はもとより様々な問題が生じよう。水の取引が国際的に可能だとすると、いかなる種類の水が国際経済法の適用を受けるのか、国際市場に

おいて水資源の保護と環境に配慮した取引は可能なのか、果たして国家は水の取引によって経済的に改善されうるのか、また各国はどの程度まで水資源の取引に関し主権を及ぼすことができるのか、こうした諸問題を、究極的に国際貿易を規制する GATT・WTO 法のコンテキストで扱う。具体的には水を取引の目的物とした場合の法的評価、および「取引と水環境保護」の観点からの GATT の関連条文について議論する。

### 生活史的にみた下水道技術の誤謬

末石富太郎

日本における下水道技術の展開と普及率の拡大は、技術者の養成と計画の広域化を2軸として推進され、これによって国民生活が向上するという単純な思考によっていた。この間多用された keyword は「欧米に比べて遅れている」の大合唱だけであった。

近約50年の生活史的に確な時間的perspectiveを設定することは容易でないが、'31年にOrtegaが措定した近代技術と人間生活との関係 - savages in civilized society - は、自動車技術など以上に、下水道技術において顕在的である。これを看過したのは明らかに下水道技術者の狭い視野と技術史観の欠如である。今回は、事例を国際水学会の報告に求めながら、学会そのものの存在様式の誤謬をも指摘する。

本稿でいう生活とは、「物質・エネルギー・情報を介した人間活動と環境との交流」を指すから、上記のような下水道技術が生活との密接な関係に基づいている、という想定はまったく意味をなさない。最

2002年度夏期現地研究会のご案内  
 『イタイタイ病の発生源となった神岡鉱山立入調査に参加しませんか！』《8月3日(土)～4日(日)の2日間》

今年夏の現地研究会は、イタイタイ病の発生源となった岐阜県・神岡鉱山を訪れます。イタイタイ病は、日本の公害病認定第1号であり、イタイタイ病裁判は、四大公害裁判の先頭を切って被害住民原告が勝訴した裁判です。

1972年の控訴審判決翌日の被告・三井金属鉱業(株)との直接交渉では、被害住民の基本的要求をすべて盛り込んだ「イタイタイ病の賠償に関する誓約書」、「土壌汚染問題に関する誓約書」および「公害防止協定」を締結しました。これら三つの文書に基づき、

実施されてきた「医療救済、農業被害補償、土壌復元事業および公害防止対策」は、裁判後 30 年経た現在も継続しています。

公害防止協定に基づき、1972 年以降毎年、発生源の神岡鉱山立入調査などを行い、抜本的な公害防止対策を実施させ、神通川の水質をほぼ自然河川並に改善させました（詳しくは、畑明郎「イタイイタイ病裁判後の住民参加による発生源規制と企業情報公開の役割」『水資源・環境研究』第 11 号、1998 年

12 月を参照）。

16 世紀に開坑された日本最大・世界有数の神岡鉱山は、昨年閉山しましたが、全国の廃バッテリーの約 3 分の 1 を原料とする鉛リサイクル製錬や、海外鉱を原料とする亜鉛製錬を行っています。閉山した坑内にある東大宇宙線研究所「スーパーカミオカンデ」でも有名です。

裁判後 31 年目に当たる今年の第 31 回神岡鉱山立入調査は、下記の日程で行われます。

## 日 程 表

8 月 3 日(土) 12:00	J R 富山駅正面南口前のバスターミナル集合
12:35	八尾行きバス乗車 13:10 萩島でバス下車・清流会館見学
14:00～17:00	立入調査学習会・清流会館大会議室(約100人)
17:00～19:00	夕食懇親会・清流会館、タクシーで富山駅前へ戻る
《富山駅前のホテル宿泊》	
8 月 4 日(日) 7:20	富山駅前の「ホテル金八」から貸切バス出発(神通川沿い)
8:30	神岡鉱山に到着(被害団体・弁護団・科学者など約200人)
9:00～14:30	工場等立入調査(7コース別で昼食弁当付き)
14:30～16:30	会社側と質疑討論(ひだ流葉自然休養村センター)
17:00	貸切バスが流葉センターを出発(約1時間)
18:00	富山駅前に帰着予定(富山空港で途中下車可)

現地研究会に参加希望の方は、5 月 31 日までに下記申込先まで、E メールまたは F A X で申し込み下さい。募集は先着順 20 名以下としますので、なるべく早く申し込み下さい。

なお、調査参加費用は無料ですが、富山駅までの交通費、宿泊費等は自己負担です。

また、詳しい資料等は参加者確定後に郵送しますので、ご住所等も明記下さい。

【申込先：畑 明郎；E-mail:RXC03125@nifty.ne.jp, FAX:0748-58-2004】

## 2001年度冬季研究会報告 - 京都・伏見 - 名水が醸し出す香りと文化を訪ねる

若井 郁次郎（大阪産業大学）

### 御香宮神社

平成14年3月9日土曜日。余寒が続いていた前日までと打って変わり、この日は、春爛漫にはほど遠いもののめっきり春らしくなり、寒さを覚悟して来られた12名の参加者の顔は明るかった。

ほぼ予定の午後1時30分に全員が集合し、緩やかな坂を2分程度歩くと、もう御香宮神社の門前に着く。門をくぐり、参道の両側に店開きしているフリーマーケットのいろいろな品物を見定めながら進み、途中それで「都名所図会」に描かれた御香水の井戸の場所に見当をつけ立ち寄り、当時の姿を想念する。また、傍らに積まれてある伏見城の残石を点検しながら、石の産地をあれこれ勝手に想定してみる。再び参道に出で、本殿へと進む。社務所に立ち寄り、前もって予約していた「御香水」のお話を願う。あいにく、宮司が所用にて留守のため、代わりの方が案内して下さる。

まず、御香宮の起こりから説明が始まる。かつては御香宮を「ごこうぐう」というていたが、聞き取りにくく他の名前と聞き間違えるため、現在「ごこうのみや」というように変えたとのことである。また、環境省名水百選に選定された御香水のいわれと、軟水である御香水にあやかり健康回復の飲用として、またお茶や料理に使用する需要が多く、採水に来られる人が絶えないが、なかには営業用らしい方がポリタンクをたくさん持参し独り占めして水を汲むため、後続の人に譲らないことから、争いがときどき起こるとのことである。どこも同じことが起きているのかと嘆息する。

続いて、本殿の東にある、御香水の水源地となっている井戸に案内される。そこに行き、竹製の覆いを開け、中を覗き込む。そこには御香水を汲み上げるポンプがあり、現在、岩盤を突き抜け、地下56メートルから地下水を汲み上げているということで

ある。なぜ、この位置から地下水の出ることがわかったのですか、という問いに対して、井戸専門業者の方が、ここから地下水が出ます、出なければ工事代は不要です、との明言があり、一切を任せたところ、ほんとうに地下水が出たということである。

また井戸の北側にある石碑の揮毫のいわれについてお話を聞く。見ると「御香水」と立派な筆跡が彫られている。御香水のお話も一通り終わり、いよいよ賞味する段になる。まず、手を清め、そして御香水を柄杓に満たし、口に運び、含み、のどを潤す。「なるほど！」と納得する。この間にも、善良な老若男女が絶え間なく御香水を求めてやってくる。傍らには、買い求めたおみくじを水面に浮かべると文字が浮かび上がる「水占い」の場所があり、現われた占いに一喜一憂している人がいる。

これで終わりと思っていたところ、庭を見せて下さるということで、社務所で靴を脱ぎ、庭園が見える奥の間に通される。この庭は小堀遠州ゆかりの庭であり、元の位置からこちらに移され、原形どおり再現されたとのことである。枯山水の庭を鑑賞しながら、庭に来る猫の苦情と、小堀遠州の生立ちの説明を聞き入る。庭を見ながら、ゆるりとし時間を忘れるのもよいと鑑賞に浸るが、つぎの予定があり、名残のなかで辞する。

### 銀座跡

御香宮の門を出て、往路を引き返し、近鉄電車の高架を抜け、京阪電車の踏み切りを渡り、伏見で最も賑わいがある大きな商店街「大手筋」（ソーラーパネルを設置した商店街でも有名）を少し下がる。一筋目を右に折れ、しばらく進むと「銀座1丁目」に差し掛かる。豊臣秀吉が伏見城を築城後、それまで堺にあった「銀座」がこの地に移設され、さらに江戸時代に江戸に移転し、今日の東京の銀座となり、親元にあたる。現在、この地には地名だけが残り、

銀座1丁目から4丁目までである。おもしろいことに、銀座の両端に両替町があり、銀座が両替町に割り込んだ形になっている。当時の銀座跡地の石碑がないかと思い、あたりを見渡し探したが見当たらず、地元の人に聞いたところ、大手筋の銀行の一遇に立っているとのことである。

大手筋に引き返し、指示された銀行の周りを探したが見つからず、あきらめて大手筋を一とおり見て、次の訪問先「寺田屋」に向かう。(この石碑は、解散後、反対側の銀行の前で見つけました。)

### 寺田屋

大手筋から外れて南に歩き、寺田屋に向かう。そのまま寺田屋に向かうのも惜しいので、途中の黄桜酒造の展示館などを覗いてみる。また、同敷地内にある「伏水」の箇所にて地下水を賞味する。「うーん、まるやか!」という声が聞かれる。この酒蔵を出て、つぎの寺田屋に歩いて1分程度で着く。船宿「寺田屋」は、往時の雰囲気を残しているが、実は以前の旅籠は鳥羽伏見の戦いで戦災にあい焼け、現在の建物は、その後、西隣の敷地に再建されたものだそうである。さて、入場料を支払い、寺田屋の中を見学する。坂本竜馬やおりょう、寺田屋の女将お登勢、幕末の志士にちなむ資料や展示物があふれている。

寺田屋事件の場所は2階にあり、坂本竜馬が宿とした「梅の間」を見る。この部屋は、身を隠すため、寺田屋正面の船着き場や濠から見えにくい位置にある。坂本竜馬は、急襲されても逃げるのが容易な家屋構造を調べた結果、ここが一番安全だと判断し、定宿としたのではなかろうかと、独り推理する。部屋には、弾痕が残る柱があり、部屋の外の柱には、刀傷が残されている。いずれの部屋も意外に狭く感じられ、しかも天井が低い。よくこんなところで刀を振り回したなと思われる。

また、とっさのときに逃げられるように襖戸を開けると目の前に階段があり、その階段下へは1階の部屋を一度通り抜けないと、行くことができない家屋構造となっている。この階段下には風呂場がある。今は、当時の風呂桶がひとつ置かれている。おりょうがここで入浴していたとき、外の怪しい気配を察

し、一糸まとわずに坂本竜馬に急を伝えた場面のところである。お登勢も伏見奉行所の幕吏と押し問答し頑張ったが、押し入られた。当初、坂本竜馬は人違いであろうと幕吏にやり返していたが、踏み入られるにおよび、レボルバーで威嚇し、談話していた三吉慎蔵とともに防戦し、二人して隙を見て暗闇に乗り、風呂場あたりから寺田屋の裏の民家を突き抜け、しばらく走り、到達した運河を泳いで渡り、材木場で身を隠し、難を逃れることができた。未明、無事であった三吉慎蔵が伏見の薩摩屋敷に救出を求め、藩邸より船が出され、親指の傷の出血がひどい坂本竜馬を助け出す。失血のひどい坂本竜馬は、しばらく薩摩屋敷にて安静療養することになる。このとき渾身の看病をしたのがおりょうであり、これが縁で二人の間にロマンが生まれたという。

さて、寺田屋の数ある展示物のなかで最も印象が残ったのは、勝海舟、坂本竜馬、西郷隆盛ら錚錚たる人物が一堂そろって写されている1枚の写真である。撮影者であり、所有者でもあるフランス人が門外不出としていたが、遺族の粘り強い要請でやっと一般公開されたとのことである。必見の写真である。

### 酒蔵と運河

寺田屋の見学を終え、京町橋を渡る。大石義雄が放蕩したという遊郭があった槿木町が遠いため、盛り場「中書島」方面を、この橋の袂から見るだけにして、そこから階段を降り運河沿いを散策する。

散策路は、初めカーブを描き、やがて直線になる。対岸の酒蔵が建ち並ぶ土手には柳があり、芽はまだ吹いていないが、春らしい雰囲気の感がある。当日は、京都疎水からの水が運河(濠)に流されていないため、水量が少なく、やや物足りない風景であった。後に聞いたところによれば、4月上旬に疎水から水が流され、十石船が通れるようになるということである。

また、昔の運河は現在の5倍くらいの幅があったそうだが、舟運が鉄道に取って代わり衰退したので埋め立てられ、水路幅が狭くなったそうである。このあたりは、伏見の中でも水網が発達していて、今もウォーターフロントがたくさんある地域である。なお、この運河の名称は「宇治川派川」であり、古

地図を見ると、かつてあたりは宇治川の流路が別れ、多くの中ノ島をつくっていた。

### 月桂冠大倉記念館

運河途中から階段を登り、ここから宇治川派川と別れ、最終の訪問先としている月桂冠大倉記念館に向かう。といっても徒歩で2、3分のところである。受付で、すでに「伏見の水と酒づくり」というテーマでお話をお願いしている同社の特別顧問兼名誉館長の栗山一秀氏を訪ねて来た旨を伝えると、別室の会場に案内される。早速、栗山氏および参加者の簡単な紹介を済ませ、氏の講演に移る。事前に参加者に郵送しておいた栗山氏提供の資料にもとづきお話が始まる。自己紹介された後、前半は笠置屋から月桂冠株式会社への小史、酒づくりの経験や勘からの脱却と科学的技術の導入、伏見の地下水の保全にまつわるエピソード、地下水調査、酒税にまつわる大蔵省の入れ智恵とそれによる日本帝国陸軍とのかけひきの苦労話、後半は運河の回復・再生、水を軸にした地域活性化の取り組みなどについて熱のこもるお話が続けられた。

お話の内容はたくさんあるので、ここでは、栗山氏のおもな話を選び、そのあらましを報告する。氏によれば、伏見の地下水脈については、大きく3層構造になっており、表層部は稻荷山や桃山御陵の山地からの伏流水が東北から南西方向に流れ、中層部は京都東山三十六峰方面よりの地下水が北から南に流れ、深層部は桂川などの河川水の伏流水が西から東に流れているとのことである。

また、地下水の保全については、つぎのエピソードが痛快である。奈良電鉄（現近鉄電車）が、御大典のため京都と奈良を結ぶため、陸軍演習場の傍を通る路線計画を立てたが、陸軍よりトンネル案にせよとの申し入れがあり、これを知った伏見酒造組合は地下水脈が遮断され、酒づくりに支障を来すことを懸念し、トンネル案に反対し、対案として高架案を陸軍に示し折衝したところ、断固反対された。しかし、気骨のある当時の伏見酒造組合は、唯一の酒税という財源をもつ大蔵省に相談することにした。相談を受けた大蔵省は良策が浮かばなかったが、代わりに一計を案じ、国家収入の3割は酒税であり、

これが減収すれば、陸軍の予算が削減されることになると稗なアドバイスを酒造組合に行った。再度、酒造組合は陸軍に赴き、この論理でもって交渉したところ、意外にも納得され、高架案が認められ、地下水が守られたという経緯をユーモラスに話された。これが現在の近鉄の高架たる所以である。

酒づくりについては、古来、経験と勘に頼るところが大きく、酒が変質することが多かったが、明治になり醸造学が導入され、逐次、酒づくりのプロセスや品質が科学的に解明され、その成果が現場に応用され、品質が安定するようになり、よいお酒が造られるようになってきたという。月桂冠では、酒づくりに醸造学による科学・技術の導入が不可欠であると悟り、いち早く東京大学から醸造技術者を招聘したということである。

一段落したところで、講演が終わり、引き続いて、酒づくりのプロセスと大倉酒造の歴史を見せていただく。その前に酒造場の一隅に設けられている水場で、この地下水を蛇の目模様の利き酒用猪口でいただく。「うまい！」の一言。その後、北斎の浮世絵「富嶽三十六景尾州不二見原」に見られる、人が入れる大きな樽が日干しされている中庭を横切り、酒づくり見学コースの酒蔵に入る。ここでは、実際の酒づくり（仕込み）の様子をガラス越しに見学する。

また館内には、かつての酒づくりに使われた道具類が所狭しと並べられている。これらの道具類の呼称名が「たぬき」「きつね」「さる」など動物名や「燕の巣」など日常用語からなっており、おもしろい命名だと感心していた。このような命名の由来は、昔、酒づくりを行う人は地方から出てくるので、道具類の機能よりも形状から想像される動物などの名前で憶えると作業が能率的に行える、との説明を受け納得する。

酒蔵を出て、記念館へ移動する。ここは、いわゆるPRコーナーで見ていて楽しいところである。たとえば、駅弁とセットにする画期的な小型ガラス瓶の導入や防腐剤を入れない日本酒の開発など販売拡張のアイデア、宮内省御用達の経緯と酒づくりの知られざる苦労、月桂冠の商品歴史をたどる。

こうした学習過程を終えて、4種類の銘柄の試飲となる。古酒から梅ワインまで一通り酒を利く人あり、お代わりする人ありで酒瓶の方に手が頻りに伸びる。少し落ち着くと、館内のお土産売り場で、それぞれお気に入りのお酒を買い求める。こうして

酒蔵見学も終わり、会社より用意していただいたお土産を頂戴して、現地解散となる。その後は、帰る人と旨し伏見の余韻を味わう人とに別れ、春宵一刻儂千金の夜を迎える。

## 東北環境体験記

地域みらい総合研究所

所長 川野 擴

### 1. はじめに

長年大阪で育ち・勤め・暮らした私が、ふとした機会から岩手は花巻の地を選び、川の仕事に携わったこともあって、北上川の辺に住まいだして4年を数えるようになった。すると、57才という年齢も手伝ってか、環境に対する楽しみ方も意識も、若年で都市生活をしていた頃に比べて随分変化していると感じるようになった。このことについて述べてみようと思う。

ちなみに、北上川は、岩手県中部に源を發し、奥羽山脈と北上山地の間を南北に、また、岩手県と宮城県にわたって流れる、全長249kmの全国屈指の大河で、花巻市は、その大河の沿岸に發達した人口が7万人の都市で、宮沢賢治が生まれ育ったことと、湯治場などの多様な温泉があることで知られている。

### 2. 住まいの環境

我が家の位置は、市中心地からは600m程度、北上川の堤防から70m程度、そして、かの賢治が名付けたイギリス海岸までが約300mというように、暮らすには、まさに絶好といえる地点にある。そこでは、川沿いの桜堤を歩いていると、春にはウグイスが歌い、夏にはカッコウと長話をすることもできるし、食料が少なくなる冬場には、庭のカイズカイブキやナナカマドの実をついばみに来るのであろうか、スズメやセキレイは言うにおよばず、オナガやカケスなどもつがいて來訪してくれる。中でも、雪で銀世界になった折などは、家の前の空き地に点々と足跡を描きながらキジがやって来て、時には、日だまりにまどろんでいる。そんな姿を見ていると、生きとし生けるものがたまらなくとおしくなる。

### 3. 北上川を楽しむ

ここを根城にして、思索が必要になってくると、北上川をカヌーイングしたり堤防沿いを散策する。

まず、カヌーイングのことである。ここで第一に挙げねばならないことは、水辺と都市域とが堤防で遮断されており、北上川ぐらいの大河になると水辺の植生も比較的豊かなこともあって、陸域とは全く異なるランドスケープとサウンドスケープが展開することである。そんな中、川風を感じながら、目の前でサギの優雅な飛翔やトビの急降下を目撃したり、運が良い時には、カワセミやヤマセミに出会ったりもする。勿論、釣り人や趣味の川漁師との出会いもある。彼らは、夏場、主にウグイを漁り、時には、ウナギや体長が60~70cmにもなるコイを得て喜び、水辺に掛けられた小屋で調理をし、酒をかたむけ、仲間や來訪者と川談義に花を咲かせたりしている。

川辺の散策は、春夏秋冬、随時行こう、中でも、サクラの花からヤナギ青める頃は、景色のみならず、フキノトウやタラノメなどを食することも出来るので、生を五感で確認できて一番の楽しさとなる。次は秋が来るだろう。この辺りの北上川の高木には、オニグルミとヤナギが多いが、たまにはクリも自生しているので、この頃の朝の散歩はそれらの採集も行き、時には、サケの遡上にも出会うことがあるので、まるで、子供に還った様な楽しさがある。また、夜に、田園地帯を流れる河原に立てば、高い天空には、都会では見られなくなったミルキーウェイが広がっているので、銀河鉄道で夢幻の界をさまようことも出来る。そういえば、今年の獅子座流星群の美しさが思い起こされてきた。

そして、白鳥やガン・カモは、この素晴らしい二



つの季節を告げてくれる役割を果たしてくれている。暮らしの豊かな思い出や期待につながるせいか、竿になりカギになって飛ぶ姿は、何時見ても、万感の思いが湧き上がってきてならない。

#### 4. 森や山といきもの連のこと

ウォーキングも私の楽しみで、時には2~3時間、距離にして20から25kmにも及びることがあり、この時は、町場はあっという間に抜けて、延々と農村地帯を歩くことになる。そこで見た特徴を挙げると、こちらの村落形態は、西の村とは違って、住居どうしが随分離れて住む、いわゆる散居型の集落となっており、しかも、冬季の奥羽山脈からの吹きおろしが厳しいこともあって、それを防ぐ屋敷林や森が大切に残されている。この他に、花巻では、一度は味わってほしい“蜜入りリンゴ”の栽培が盛んなことから、両方が合わさって森の連なりが形成される場合があり、そのような里の森には、モグラやノズミあるいはムササビやタヌキなどの他に、食物連鎖の頂点に立ち、宮沢賢治が「十二夜」で描いたフクロウやオオコノハズクまでもが棲息するので、気分が向くと、森の知恵者のドロスケドッホーと鳴く声を聞きに行く。

また、時には、こちらの人に山歩きに連れられる。人には知られていないが、花巻の山は、世界遺産のあの白髪山地にも匹敵するブナ林が広がっているとのことで、その素晴らしさを知りたいならば、論よりは証拠というとおり、まずは、分け入るがよい。そして、早春の谷地に一面に広がるカタクリの花に出会えば、誰でもが、メルヘンの世界に引き込まれるであろうし、その奥に続くナメトコの沢（岩床が滑らかに削られた溪流）では、きっと、イワナが待っていることと思う。

薄緑色の葉を持つ夏のブナ林は爽やかで、山歩きには最適である。そして季節が移っての秋、梢を離れた葉が谷合から吹き上げる風に煽られて天空一面に舞う姿こそ、まさに“詩”そのものの感じがする。そんな場所に出かけるには、北上川の右支川である豊沢川を遡り、さらにダム湖上流から山に取り付き、枝間に木切れや草が敷き詰められた「クマの座」や彼らの足跡を発見しながら、毒ヶ森の頂上を目指す

とよい。運が良ければ、クマやカモシカに出会えるかもしれない。そこで、昨年あった、この辺りの人達とクマとの出会いの話を紹介しておこう。

- ・ 物音に目覚めて隣室を覗けば、座ってリンゴを食べており、そして逃げた。
- ・ 山菜採りで突然出会ったので、“ともえ投げ”にして追い払った。
- ・ 里に出た子連れクマを追うも、河原に姿を隠したので追撃を止める。
- ・ クマも喜ぶ幸ちゃんのリンゴ（無人販売店のキャッチフレーズ）

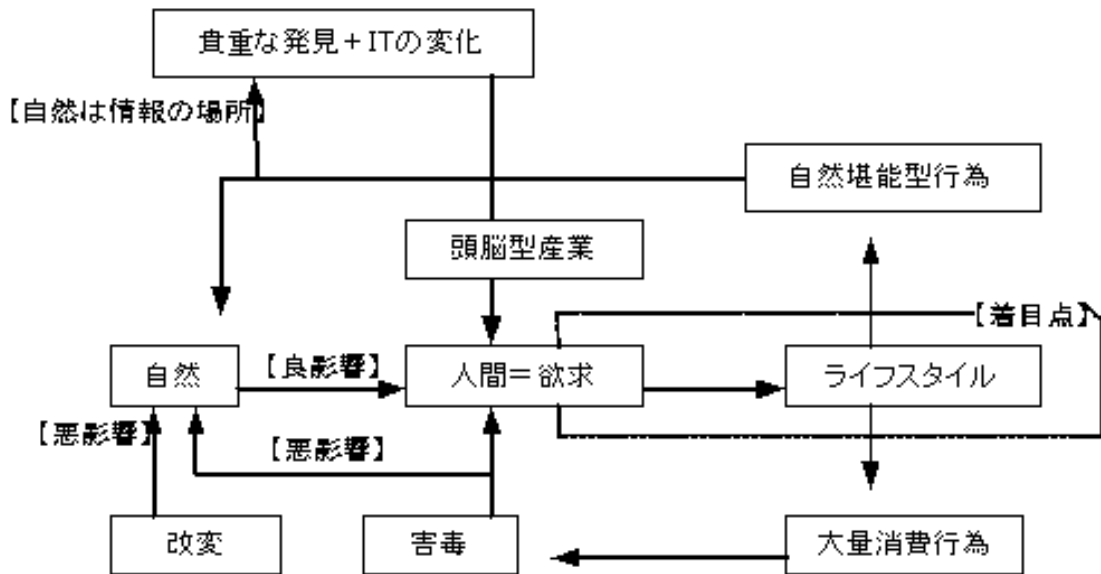
どうも、こちらの人達は、万やむを得ない限りは、彼らとも適度に付き合っているようである。

#### 5. 私の中の変化

本好きから、都会にあっても、勉強すれば真理が見えると思ってきた私だが、こちらで自然と遊び出して、次のように考えるようになってきた。

- ・ 画家を活動させ鉛筆を取らせる山野の景は、そのものが芸術作品ではないのか。
- ・ 地球が回っていると言ったガリレオは、日夜、天体を観測しながら軌道の計算に勤しんだであろうし、大陸が移動していることを発見したウヴェナーは、ロックハンマーとコンパスなどを肩げて各地を巡り、ビーグル号での動植物達との出会い旅から帰ったダーウィンは、進化論を提唱することになった。この様に、そもそも科学とは自然を観察することにあり、逆にいえば、自然は、様々な面白いパズルを用意してくれている。
- ・ 現代社会は、崇高で複雑な創造物を使いこなせず単純な人工物に目を奪われ、飽き、廃棄物の川を築いているのではないだろうか。

都市からこの地に来てライフスタイルは大いに変わった。元来少なかった物欲は一層少なくなり、知識への執着はより根源的なものになって、自己実現が進化したのか、充実感も幸せ感もより高くなった。このことから、環境の問題も、この方向から考えていきたいと思っている。



環境問題への取り組みマップ

学会事務局からの案内と連絡

所属先、連絡先にご変更はございませんか？

現在、学会会員名簿を作成しております。4月以降、住所・所属先等のご変更がある方は、学会事務局までお知らせ下さい。なお、掲載事項は「名前・所属・研究テーマ・連絡先（住所・E-MAIL）」です。連絡先の掲載希望の有無は、会費請求の際にお伺いしていましたが、希望変更がございましたら併せてご連絡下さいますよう、お願い致します。

原稿募集！

学会誌「水資源・環境研究」への投稿を募っております。次号の締め切りは**8月31日**です。投稿規定や執筆要領は学会誌の巻末にあります。投稿希望の方は下記担当理事までご連絡ください。お問い合わせなども下記までご遠慮なく。

学会誌編集担当理事 千頭 聡

〒475-0012 愛知県半田市東生見町26-2

日本福祉大学情報社会科学部

電話0569-20-0112 FAX0569-20-0128

E-Mail [chikami@handy.n-fukushi.ac.jp](mailto:chikami@handy.n-fukushi.ac.jp)

電子メールアドレスをお知らせください！

電子メールによる情報提供やお知らせ等ができるように準備をしています。電子メールのアドレスを下記学会事務局まで電子メールにてお知らせください。

学会事務局 仁連孝昭

〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500滋賀県立大学環境科学部 電話0749-28-8278

[niren@ses.usp.ac.jp](mailto:niren@ses.usp.ac.jp)